



吉識クニと雅夫  
明治41年  
(雅夫生後106日)

## 船舶工学の権威

### 名誉町民 よ しき まさ お 吉 識 雅 夫

明治41年1月20日  
～平成5年6月27日

定年退職後も学術振興に尽力。日本学術振興会理事長等を歴任し、国内の学術振興、海外研究者との交流、

自叙伝『運鈍根』直筆原稿

### 福崎町 吉識雅夫科学賞

「吉識雅夫科学賞」は、福崎町名誉町民である吉識雅夫の顕彰を図るために平成20年度に設立したもので、町内の小中学生から自由研究などを募集し、有識者による審査選考を経て賞が決められます。毎年、約50点もの作品が集まります。理科に興味を持ってもらい、福崎町に第2の吉識雅夫が誕生することを夢見しています。

- 明治 41年 神崎郡八千種村大貫出身の吉識貞の長男として長崎県対馬にて誕生
- 昭和 5年 東京帝国大学工学部船舶工学科卒業
- 昭和 7年 東京帝国大学工学部助教授
- 昭和 19年 東京帝国大学工学部教授
- 昭和 20年 東京帝国大学教授より工学博士の学位を授与
- 昭和 28年 東京大学工学部教授
- 昭和 36年 日本造船協会会長
- 昭和 37年 東京大学工学部長
- 昭和 40年 宇宙開発審議会委員
- 昭和 41年 日本学士院賞受賞
- 昭和 43年 東京大学教授を定年により退職  
日本学術振興会理事長  
藤原科学賞受賞  
紫綬褒章受章
- 昭和 44年 日本学術会議副会長
- 昭和 50年 文化功労者に顕彰
- 昭和 51年 福崎町名誉町民
- 昭和 53年 勲一等瑞宝章受章
- 昭和 57年 東京理科大学長  
日本学士院会員  
文化勲章受章  
学士会理事長
- 昭和 63年 永眠
- 平成 5年 正三位勲一等旭日大綬章受章

## 福崎の

# 偉人

福崎町はさまざまな分野で活躍する偉人を数多く輩出しています。なかでも、文化勲章を受章した柳田國男と吉識雅夫は、民俗学と船舶工学に大きな足跡を残した第一人者です。福崎が誇る2人の名誉町民。その生涯をたどってみます。

吉識雅夫は、明治41年生まれ。船舶工学の権威として知られます。東京帝国大学工学部船舶工学科を卒業し、講師、助教授を経て、同大教授となりました。研究の中に造船における電気溶接技術や船体構造技術があり、これによって大型タンカーが造られるようになったことは広く知られています。船の大型化や溶接に関する吉識の研究は、日本を世界一の造船王国に導くことに寄与しました。

吉識雅夫は、明治41年生まれ。船舶工学の権威として知られます。東京帝国大学工学部船舶工学科を卒業し、講師、助教授を経て、同大教授となりました。研究の中に造船における電気溶接技術や船体構造技術があり、これによって大型タンカーが造られるようになったことは広く知られています。船の大型化や溶接に関する吉識の研究は、日本を世界一の造船王国に導くことに寄与しました。

日米間の科学、教育文化協力事業に貢献しました。また、国内の宇宙開発政策にも関与。昭和54年から昭和60年までは宇宙開発委員会委員長代理として国産大型H-IIロケットの決定等に携わりました。

昭和57年の文化勲章をはじめ、多くの賞を受賞しました。その功績をたたえ福崎町名誉町民となったのは昭和51年のことでした。



吉識雅夫  
愛用の品々



下総布川町にて  
明治21年5月

## 日本民俗学の父

### 名誉町民 やなぎ た くに お 柳 田 國 男

明治8年7月31日  
～昭和37年8月8日

柳田國男は明治8年、神東郡辻川村(現福崎町西田原)に、儒学者の父松岡操(約齋)、母たけの六男として生まれました。上京後、森鷗外と出会い、歌人松浦萩坪に師事。田山花袋、國木田独歩、島崎藤村ら文学仲間と交流を深め、「文学界」に新体詩を発表しました。

しかし、「なぜに農民は貧なりや」ということばに示されるように当時の社会構造に対する鋭い疑問から文学への傾倒を絶ち、農政学を志すこととなります。東京帝国大学に学び、卒業と同時に農商務省へ。勤めのかたわら各地を旅して、地方に残る習俗や伝承を研究しました。『後狩詞記』『遠野物語』など、民俗学に通じる書を著したのはこの頃です。また、雑誌「郷土研究」の創刊は、民俗学が独自の領域と主張を持つための基礎となりました。

大正8年に官を退き、翌年朝日新聞社の客員となつて、全国を調査旅行し、『海南小記』などの紀行文を発表。昭和5年、同社を退職後はますます民俗学に専念し、雑誌「民間

### 福崎町柳田國男 ふるさと賞

柳田國男の功績を讃え、平成25年度に「福崎町柳田國男ふるさと賞」がつけられました。この賞は、町内の小中学生が地域の歴史や民俗文化について調べたものを評価し、選ばれた作品におくられます。第2の柳田國男が誕生することを願い、郷土に愛着と誇りを持つ子どもたちの育成に取り組んでいます。



それぞれの分野で才能を開花させた松岡五兄弟

伝承」の創刊や、民俗学研究グループの拡大に取り組みました。その後の半生は、日本各地の伝承記録の集大成に力を注ぎ、日本民俗学を確立するとともに、『民間伝承論』『海上の道』など、多くの著作を残しています。

昭和26年には文化勲章を受章。37年には福崎町名誉町民第1号となりました。



自叙伝  
『故郷七十年』

## 英才! 松岡五兄弟の功績



かなえ  
松岡 鼎  
松岡家の長男。万延元年生まれ。はじめ師範学校に入り、郷里の小学校長となったが、後に東京大学医学部別課で学び、医師となり千葉県布佐に住む。東葛飾郡会議員、千葉県医師会長、布佐町長等となり、地方自治に大きく貢献した。昭和9年75歳で没。



しずお  
松岡 静雄  
松岡家の7男。明治11年生まれ。海軍兵学校を首席で卒業。日露、日独両戦役に従軍。海軍軍令部参謀、オーストリア大使館付武官、戦史編纂委員等になったが、海軍大佐で退官。言語学・民族学を研究し、多くの業績を残した。著書に『太平洋民族誌』、『日本古語大辞典』、『蘭和辞典』等がある。昭和11年59歳で没。



みちやす  
井上 通泰  
松岡家の3男。慶応2年生まれ。後に吉田村の医師井上碩平の養子となる。帝国大学医科大学に学び、眼科医となる。史学に造詣が深く、歌人としても有名。宮中顧問官、貴族院議員、帝国芸術院会員、御歌所寄人等に任ぜられる。『万葉集新考』、『播磨国風土記新考』等著書多数。昭和16年76歳で没。



えいきゅう  
松岡 映丘  
松岡家の8男(本名・輝夫)。明治14年生まれ。東京美術学校卒業後、母校の教授となる。大和絵の研鑽と発展に生涯をかけ、新興大和絵会、国画院を結成。画壇に大きな影響を与えた。帝国芸術院会員。昭和13年58歳で没。

